
碎ける月

須藤彦吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

碎ける月

【Nコード】

N5076Y

【作者名】

須藤彦吉

【あらすじ】

刑事だった父親が起こした事件により、他人との距離を置くようになつた少女、栗原玲央。親友である佐伯明日香にだけは心を許している玲央だったが、その明日香が姿を消し、戸惑う玲央の元に謎めいたDVDが送られてくる。収められていたのはある交通事故に関わる映像だったのだが

投げつけられたのは多分ノートの切れっ端を丸めたものだ。痛くはないけど、真後ろなら普通に背中をちよつと触るとかでもいい筈だ。なのに、こいつは輪ゴムとかクリップとかでいつもアタシの頭を狙ってくる。

振り返って襟首を引つ掴んでやろうか。

けれど、さすがのアタシもそんなオーバーアクションは起こせない。心の閻魔帳に一つバツテンを記してしぶしぶ教壇に眼を戻す。

そもそも、何でアタシがこんなここにいなきゃならないのか。期末テストは過去最高の点数で無事に切り抜けたというのに。まあ、快拳を成し得た手段は天地神明に誓ってカンニングだったりするが、などとウダウダ考え事をしていると。

「……えーっと、今日はここまでですけどお、分からない人いますかあ？」

さりげなく教室を見回したけど手を挙げている者はいなかった。アタシも当然挙げていない。教師は何故か、ハズレくじを引いてしまったみたいなの残念そうな表情をしていた。そういう顔立ちなんだという説もあるが。

「そうですね。じゃあ、大丈夫ですねえ。明日もう一回、今日のところテストしますから。あ、明日の答えは回収するのでそのつもりで……」

小さな声で誰かが「えーっ？」と不満の声をあげる。同意を示さざわめきがそれに続いた。

アタシは素知らぬ顔をしつつ、折り畳んでいたテストの答えを広げた。

一応、チャレンジしてはみた。しただけだが。第一問のところに眠気を催す系の呪文が書き散らかしてある以外は完全な白紙。やる気？ そんなもん、ある訳ない。

そんなことを考えていると授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

「きりーっ、礼」

「ありがとうございましたあ」

日直の間延びした声にやる気のない挨拶が続く。

これで福岡で指折りのミッション系私立女子高だというから呆れてしまうが、ここがお嬢様学校だったのは昔の話で、今はちよいと学費と寄付金とプライドが高いだけの普通の高校に過ぎない。アタシが通えているのが何よりの証拠だ。

グダグダ考えても仕方ない。教科書その他をバッグに放り込んで帰る準備を始めた。補習は昼迄で午後は部活がある奴らはそっちへ、アタシのような帰宅部は帰ることになる。教室に居残っていつまでもお喋りに興じる趣味はアタシにはない。

あつたとしても、アタシにそんな友だちはいないが。

「さてと」

「ちよつと待ったあ!!」

立ち上がるうとするアタシを遮るように明日香が前に回り込んできた。

念入りに、それでいて無造作な感じにも見える縦巻きの長い髪。透明感のある色白の肌にはほんのちよつと幼さの残る顔立ち。黒目がちな眼だけがそこだけ別の生き物のように存在を主張している。制服の袖から覗く腕もスカート裾から伸びる脚も何かの拍子に折れそうなほど華奢で、まるで等身大の人形みたいだ。これで声が甘つたるいアニメ声だったら即座に親不孝通りのメイド喫茶に売り飛ばすところだが、声だけはイメージと違ってちよつと低め。アタシのドスの効いたハスキーヴォイスほどじゃないが。

「……何ね、明日香？」

「何ね、やなかって。授業中に余所見とかしたらダメやん」

「せっからし、あんたに関係なかる。って言うか、何でここがんとこにおるとね。学年一位獲ったって自慢しとったくせに」

「玲央のお目付け役に決まっとうやん」

「失せる」

ぶつと頬を膨らませながら、明日香が主のいなくなったアタシの前の席に座る。

背もたれの上で組んだ腕に突っ伏するように顎を乗せているので、尊大にふんぞり返るアタシを下から見上げるような格好になった。それでもなくてもアタシと小柄な明日香では二〇センチ以上も身長差があつて、座高も必然的に段差がある。不思議なものを見るような眼で見上げられるのはいつものことだ。

しばらく無言で睨み合っていると、明日香の赤い唇がニツと横に広がった。

「……何、ニヤニヤして。気持ち悪」

「ちよつとお、気持ち悪かとか言わんでよ」

「せからし。言いたかことがあるならさっさと言わんね」

「明日のテスト、一人でだいじょうぶと？」

「ただの小テストやん。テキストにやり過こせば済むって」

「あつきた。玲央、先生の話、聞いてなかったと？」

「……？」

「そのただの小テストで合格点取れんかったら、補習延長ってよ？」

「……なんて？」

聞いてなかった。教師が同じところをテストすると口にした後は、どうやって明日の補習をサボるかしか考えてなかったからだ。

いくらアタシが馬鹿でも範囲さえ判つていれば一夜漬けくらいできる。が、その為には今日の小テストの詳細な解答が必要だ。

アタシは黙って手を差し出した。

「なん？」

「寄越せ」

「何を？」

「あなたの答案」

「それがひとにモノ頼む態度？」

再び無言の睨み合い。

どうでもいいが、ガンのつけ合いでアタシと渡り合える女は滅多にいない。もともと上背があつて威圧感充分な上に、目つきもあまり良ろしくないからだ。ここしばらく切つてないので少しウェーブ

のかかった髪がセミロングくらいになっていて、いつぞやバツサリとベリーショートにしたときは我ながら男にしか見えなかった。

その点では明日香の度胸の据わり具合　　と言っか、怖いもの知らずっぷり　　だけは認めざるを得ない。

「……条件は？」

ため息が洩れる。力尽くで取り上げてもいいが、答案だけ見たところでアタシには何が何だか分からない。解説者もセットで必要だった。

「これから、あたしの買い物に付き合ってよ」

「アタシ、そがんヒマやなかよ」

「ウツソばかり。どーせバイクで走りに行くっちやる？　　そういえば、後ろに乗せてくれるって約束はどうなったと？」

「……そんな約束したっけ？」

ああ、期末テストのカンペ作るのに分からないところを解説させたときにそんなことを言ったような気がする。つまらないこと覚えてやがんな。

「残念やけど、まだ調子悪かよねえ」

「バンちゃん、直らないの？」

「ひとのバイクに妙な仇名つけんで」

アタシの愛機、メタリック・レッドのスズキ・バンディット250V。ボディカウルがなくてエンジンがむき出しのいわゆるネイキッド・バイクだ。テールエンドの流麗なデザインがセクシーな印象を与えるところが気に入っている。

ただ、古いバイクなのであちこちに持病を抱えていて、最近ではエンジンに不整脈の兆候が見られるようになった。部品の交換と調整は終わっているので乗せてやっても構わないのだが、気が乗らないのには別に理由がある。アタシはタンデムってやつがあまり好きじゃないのだ。こいつみたいな運動音痴がバディの場合は特に。

「その約束はもう少し待ってよ」

「オツケー。直るの楽しみにしとっよ」

「……ずいぶん素直やん？」

「だって、走りに行けんとやったら、お勉強は夜でもいいってことやん？ 夕方までゆっくり遊べるやんね」

明日香は退屈しきった子猫のように首を傾げながら、アタシの眼を覗き込んできた。見た目と違って結構気が強いところがあるが、その一方でこうやって甘えてきたりもする。こういう女を世間では小悪魔というのだろう。アタシにはどうやっても習得できない芸風だ。

「……アタシ、担任から呼び出し喰らっとうつたいね。職員室に寄ってくるけん、校門で待つとつて。それと何か飲むモン買つといて、そう言つて席を立った。担任の用事なんてどうせ大したことじゃないが、事情があつてシカトもできない。くそ、面倒くせえ。

教室を出ようとしたところで明日香がアタシを呼び止めた。

「何ね？」

「買つとくの、コーヒーでいいよね？」

アタシは返事の代わりに小さく手を挙げた。

アタシが通う高校は福岡市の中央区と城南区
じょうなんく

の境目辺り、六本松
ろっぽんまつ
にある。

松の木が六本あつたのが地名の由来なのはたぶん間違いないけど、それらしい松の木を見たことは今のところ一度もない。九州大学の六本松キャンパスの他にも短大や高校が集まっている、ちょっとした学生街みたいところだ。もっとも九大キャンパスは西区の伊都いと

とかいう地の果てに段階的に移転していて、あと何年かのうちに跡形も無くなってしまうらしいが。

その頃にはさすがにアタシも高校を卒業しているだろうし、今日の小テストの結果からして九州の最高学府に進めるとも思えないので、あまり関係ない話ではある。

そのキャンパス前の停留所から路線バスに乗って天神に向かった。福岡市の中心市街地というのは意外と狭くて、六本松からだ国道二〇二号線 別府橋 べふばし

通りから国体道路、けやき通りと名前は変わるが要するに一本道をほんの二〇数分ほど西鉄バス名物の荒っぽい運転に揺られるだけで天神に着いてしまう。

アタシたちは警固
けご

公園前でバスを降りて、着替えるために天神
てんじん

地下街に入った。ウチの学校では帰りに寄り道をすることは禁止されている。その為、アタシたちは教科書やらノートやらを突っ込んだカバンとは別に、着替えを入れたカバンを持ち歩いている。遊んでいる間は地下鉄駅のコインロッカーにでも放り込んでおけばいい。

地下街のトイレでアタシは胸に乱暴な字で FUR NAECH STES MAL OHNE ITALIEN と書かれたブルーのTシャツとメンズシルエットのストリートデニム、adidasのスニーカーに着替えた。主に面倒くさいという理由でアタシのワードローブはこの手のシンプルなアイテムに統一されている。ちなみにメッセージの意味は 次はイタリア抜きでやろうぜ だ。ドイツの酔っ払いのオッサンが日本人を見かけると投げ掛ける定番の不謹慎ジョークだというのはつい最近知った。

「また、そがんと着るんっちゃけん……」

明日香は不満そうにため息をついた。

「何が？」

「スタイルいいっちゃけん、おしゃれしたらいいとって言いよう

と」

「……アタシの何処が？」

「背は高いし、手足も長いし。割と可愛いし。おっぱいもおっきいやん」

「割とって何ね。それに胸なんか邪魔くさいだけやん。肩こるし」
「それは贅沢つてもんじゃ？」

そうかもしれないが、アタシにとっては邪魔なんだから仕方ない。身長は百七十三センチ、体重が六〇キロ半ば。筋肉がつきやすい体質で決して太っている訳じゃないが、お世辞にも細身とは言えない。中学時代の平坦さが嘘のように高校に入った頃から膨らみ始めた胸は先日、遂にFカップを越えてGに達した。肩こり云々はともかく、いい加減にしてくれないと収まるスポーツブラがなくなる。

一方、そんなことをほざく明日香はというと、見るからにフェミニンなオフホワイトのワンピースにほっそりした身体を包んでいた。ブランドに興味も知識もないアタシが見ても、それがそこら辺のバーゲンで売っているような代物じゃないことくらいは見取れる。聞いた話によれば英国ブランドがお好きなんだそうで、今着ているのはローラ・アシュレイとかいうブランドのものだ。手にしているのはバーバリーのトートバッグ。お馴染みのチェック柄くらいはアタシでも知ってる。

「行こっか、玲央」

「……ああ」

明日香が見たいショップは大名

だいまよう

にあるらしかった。

福岡の　というより九州の商業の中心地である天神の真裏にあるにもかかわらず、まるで時間の流れから取り残されたような佇まいを残している一画だ。昔は特に何と云うこともない路地だったけど、今では安い賃料に惹かれて集まってきたショップやカフェがずらりと軒を連ねている。古いものと新しいものが入り混じる混沌と

した雰囲気サブカルチャー向きなのか、天神よりもここを目当に買い物に来る客の方が多いという話もあるくらいだ。

そんな中をアタシは明日香と連れ立って歩いた。時折、ショーウインドウに映る自分たちの姿を見ると、まんまカップルにしか見えないのには閉口した。女同士だというのに明日香が腕を組みたがるのにはもつと閉口した。いつものことだし、言ってもやめないのが好きにさせているが、正直かなり面映い。

「ねえねえ、これ良いと思わん？」

「あー、似合つとつ似合つとつ」

「ちよつとお、せめて見てから言うてよ」

「どうせ、アタシの意見なんか聞かんやん」

「そがんことなかよ。玲央がコーディネートくれるんやったら、それ着るよ」

「……アホか、そつが面倒くさいことできんて。ほら、さつさと選ばんね。グズグズしとつと置いてくよ」

「ねえ、そがん急がんでもいいやん！」

こういうことをしていると、女のアタシでさえ世の男性が女の買い物に付き合つのを躊躇する気持ちが理解できてくるから不思議だ。結局、その店では見るばかりで何も買わなかった。しかし、買い物気分には火がついた明日香はその後アタシをあちらこちらに連れ回した。大名からソラリアプラザ、天神地下街に戻つて、早くも初秋のコーディネート展示しているショーウィンドウを歓声を上げながら眺めて歩く。もちろん、上げているのは明日香だけだ。

アタシたちはそのまま地下街からギャル・ファッションの聖地

なんだそうだ。である天神コアに入った。

が、そこにもほとんど長居はしなかった。正確に言えばできなかつた。ラメ入りメイクにキャミソール、ローライズ・ジーンズや太腿丸出しのショートパンツの店員と、同じような格好の客でござつた返す中で明日香がギャル系ファッションに関して辛辣な批評を展開し始めたからだ。アタシは慌てて明日香をビルの裏口から外へ連れ

出した。

何考えてんだ、こいつは。

近くにあったスターバックスに入って、アタシはようやく一息つくことができた。

「あー、楽しかったあ！」

明日香はヴァニラクリーム・フラペチーノをスプーンですくうと幸せそうな表情で口に運んだ。行く先々で服やアクセサリを買い込んでいるので、バーバリーのトートバッグはパンパンに膨れ上がっている。そりゃ楽しかっただろうよ。

「……あんだねえ、いい加減にしてよ。あがんとこでケンカ売るよ。うなこと言うて、絡まれたらどうするつもり？」

「そんな時は玲央が守ってくれるやる？」

真面目に話をしているのがバカバカしくなるような屈託のない笑顔。アタシは倒れこむようにソファの背にもたれ掛かった。

本日のコーヒーマイル・ロロツサとかいうブレンドだった。ちよつとだけパイシーな味わいが弛緩した気分に合わせて、アタシはゆっくりと味わいながらコーヒーマイルを啜った。甘いものが苦手なのでこういうところではコーヒーマイルしか飲まない。

明日香は本日の獲物をバッグから引つ張り出しては、それがいかにセンスの良い物でどれだけ流行を先取りしているかについて熱く語った。生返事を返しても気にならないようだったので、彼女が熱弁を振るうのに任せておいた。

思えば、アタシと明日香は共通項よりも真逆なところの方が多い。小さな頃から可愛がられて育ったせいかわガママで感情の起伏が激しい明日香と、どちらかというとなんと泰然として群れて行動することが好きじゃなかったアタシは不思議とウマが合った。

もちろん彼女だけがアタシの友人だった訳じゃない。空手道場に一緒に通った子もいるし、学校の友達だった。今思えば笑ってしまうような清純な交際をした男の子だっている。

けれど、彼らはある事件を境にアタシの周りからいなくなってしまう。ある者は親から遠ざけられるように。ある者は自分の意思で。今、友だちでいてくれるのは明日香だけだ。

人殺しの娘であるこのアタシと。

2 . o n l y f r i e n d

福岡県警の警察官だったアタシの父、栗原真司が人を死なせて逮捕されたという知らせは、一昨年のゴールデンウィークの真っ只中にもたらされた。

率直に言つて、アタシはその日のことをよく覚えていない。

覚えているのは住んでいた東区の官舎前にあつという間にできあがったカメラの砲列、ライトやフラッシュから放たれる目を灼くような眩い光、マスコミから浴びせられる怒号のような非難の声、群がる野次馬の好奇の眼差し。母親を早くに亡くして父と二人暮らしだったアタシを保護するために婦警が派遣されてきていたが、アタシは彼女からすら疎ましげな視線を向けられていた。

一体、何がどうなっているのか。父は何をしでかしたのか。人を死なせたというが相手は何者なのか。父はこれからどうなるのか。そしてアタシは

アタシは思いつくままの疑問をぶつけた。

でも、答えてくれる人間は一人もいなかった。後で知ったことだけど、父の上司や同僚たちは県警上層部の命令でアタシとの接触を禁止されていた。父が起こした事件は、県警にとってそれほどデリケートな扱いをせざるを得ないものだったということだろう。皮肉なことにアタシが事件のあらましを知る方法はマスコミ報道しかなかった。

それと後から聞き及んだ話を合わせるところだ。

父が属していた中央署生活安全課と県警薬物対策課の合同捜査班は、親不孝

おやふこう

通りのクラブ

踊るほうのヤツだ

で捌かれていた合成麻薬M

DMAの捜査をしていた。内偵は数か月に及んでいて、周辺事実の確認は順調に進んでいた。外堀は埋まりつつあった。

ところがその過程で圧力がかった。検挙するには決定的な証拠に欠けるという理由で捜査の中断を命じられたのだ。

捜査に圧力がかかること自体が珍しいことじゃないのはアタシも父親を通して知っている。はつきりと事情を聞かされたことは勿論ないけど、アタシの前では滅多に荒れない父が不機嫌そうに酒を呷るところを見たことも何度かある。

現場の刑事たちは反発した。しかし、上の決定に逆らえるはずもなく、誰もがこの事件は終わったと思った。

けれど、実際はそうじゃなかった。どういう訳か、父はこの事件にひどく執心していて、他の事件を追いながら独自にこの密売事件を追っていたのだ。そして、グループのリーダー格の少年が手に入ったばかりのMDMAを持って親不孝通りのクラブにくるといっ情報を手に入れた。

そうやってあの夜、父は少年を現行犯逮捕するべく、相棒の若い刑事を伴って現場に現れたのだ。

少年は情報が洩れていることに気付かず、まんまとクラブに現れた。父が少年に職務質問をかけ、同時に若い刑事が彼の腕を捻りあげた。あとは彼の懐にある麻薬のパッケージを取り上げ、少年を連行すれば父たちの仕事は終わる筈だった。

ところがそうはならなかった。一瞬の間を置いて若い刑事の鳩尾に一撃を入れた少年が逃走したのだ。父は相棒を残して少年を追った。

それから二人の間で何があったのかは、実はよく分かっていない。若い刑事が長浜公園で二人に追いついたときには父は肩で荒い息をしていて、少年はその足元でぐったりと伸びていた。父の拳は少年の鼻血と裂けた傷口から流れる血で染まっっていて、通行人の通報で駆けつけた舞鶴

まいづる

交番の制服警官が父を激しい口調で詰問していたそうだ。少年は救急車で病院に運ばれたが倒れたときの打ちどころが悪く、明け方を待たずに息を引き取った。死因は倒れたときに道路の縁石で頭を打ったことによる頭蓋骨骨折と脳挫傷だった。

報告を受けた県警上層部はさぞ戦慄したところだろう。捜査終了を命じた筈の事件を単独で捜査していただけでも十分に命令違反なのに、被疑者を死なせてしまったのだから。前代未聞とはこういうときのためにある言葉だ。そして、追いつきをかけるように　　と言っているのかどうか分からないが　　とんでもない事実が発覚した。死んだ少年がM D M Aを持っていなかったのだ。密告に気付いた少年がとつさに隠したのか、密告自体が畏だったのかは分からない。ただ、状況が警察にとって非常に厳しいものになったことだけは間違いないかった。

暴力警官に対する世論の追求は激烈の一語に尽きた。アタシも”人殺しの娘”として凄まじいイジメの真っ只中に放り込まれた。入ったばかりの高校ではクラスメイトから一斉に背を向けられ、一週間で辞めた。通っていた空手の道場からも丁重に出入り禁止を宣告された。始めたばかりのアルバイトは即日クビになった。

裁判で父は大筋で起訴事実を認めて謝罪の意を示したが、少年を殴った理由については「カツとなって覚えていない」の一点張りで動機が明かされることはなかった。結局、父は懲役六年五か月の実刑判決を受けた。一審は検察が量刑不当で控訴したが、二審では検察・弁護側双方が上告せず刑が確定して、父は程なく北陸の刑務所に収監された。

問題はアタシの身の振り方だった。母親の両親は前の年に相次いで病没していたし、親類縁者といえは遠い海外に嫁いだ伯母がいるだけだった。アタシは疎遠な父の親類に頼らざるを得なかった。

父の実家は長崎でガソリンスタンドとコンビニエンスストア、ファミリーレストラン、観光ホテルなどを経営する裕福な一族だ。父の弁護士から聞いた話では、父は両親に「玲央のことをどうかお願

いします」という内容の手紙を送っていたらしい。達筆なくせに筆不精で、報告書すら相棒の若い刑事に代筆させていた父からは想像もつかないことだった。アタシはほとんど行ったこともない長崎に引越すことになるのだろうかと思然と考えていた。

ところが意外なところから横槍が入った。亡き父方の祖父の弟、アタシからすると大叔父にあたる長崎の県議会議員が、一族が人殺しと親戚関係にあると知れ渡るのを嫌ったのだ。今さら勘当同然の兄の娘に戻ってきてほしくない二人の叔父と一人の叔母もそれに同調した。祖母だけは何とか手元に引き取ろうとしてくれたらしいけれど、長らく療養生活を続けていて一族内の実権を失った彼女には意見を通す力はなかった。

アタシは”住み慣れた街を離れるのは嫌でしょう？”というもつともらしいが的外れな心遣いによって、叔母が所有する百道浜ももちはま

のマンションで一人暮らしをすることになった。

事実上の厄介払いであることを除けば、扱いはそれほど悪くなかった。追い出された高校の代わりに祖母の母校である今の高校に無試験で編入させてくれたし、そこら辺の若いサラリーマンの給料以上の小遣いが口座に振り込まれるようにもなった。マンションには週に二度、ハウスクリーニングのサービスもくる。事前に断るよう言われているが、大きな買い物も祖母名義のクレジットカードで自由にできる。

けれど、その何もかもがアタシの心をささくれ立たせるのに充分だった。アタシは誰の目もないのをいいことにすっかり荒れて、夜の街を遊び歩くようになった。

*

*

*

去年、九月になっても自主的な夏休みを続けていたアタシは中洲
なかつ

のど真ん中にある小さなゲームセンターで佐伯明日香と出会った。

お人形さんみたいだな、というのが最初の印象で、アタシは自分のボキャブラリーの貧困さに呆れたものだ。

実は彼女には見覚えがあった。というより、学校で彼女のことを知らない者はいなかった。祖母の頃と違うといっても未だに“お嬢様学校”と呼ばれるウチの高校でも明日香は指折りのお嬢様だからだ。家が何をやっているのかはよく知らないけど、去年の冬、珍しく福岡に雪が積もった日にロールズロイス・ファントムで学校に送ってもらって来たのを見かけたことがある

ゲームセンターにいるのに遊ぶ様子もなく、ただ興味深げにキヨロキヨロと店内を眺めて歩いている様子は、買い物をする親から「見てるだけよ」と言われて玩具売り場で待っている小さな子供を思わせた。

控えめなフリルの付いたサックス・ブルーのワンピースは猥雑で騒々しい夜の街では明らかに異質だった。飛んで火に入る夏の虫じゃないけど、その姿はなんとも隙だらけで、店内で遊んでいる男どもから見ればエサ以外の何物でもなかった。連中はしばらくは遠巻きに見ていたけど、やがてナンパ待ちの女の子をモノにするのが生きがいのバカが馴れ馴れしく声をかけて、肩を抱かんばかりに彼女に寄り添った。

どうするのかと見るとはなしに見ていたら、彼女は女のアタシでさえドキリとするような艶然とした微笑を浮かべていた。

(…………ふん、お嬢様っていつでもその程度か)

アタシは興味を失って苦戦中のクレインゲームに戻ろうとした。度肝を抜かれたのはその直後だった。パアンという男の頬を張る小気味のいい音が鳴り響いたのだ。

明日香はそのままその場を立ち去ろうと踵を返した。誰もが呆気にとられてその姿を見送ろうとした。

最初に我に返ったのは引っ叩かれた男だった。

屈辱で顔を紅潮させながら駆け寄って明日香の細い腕を捻り上げた。明日香は悲鳴を上げたが、男は収まらなかった。入口に逃げようとする明日香をゲーム機に押しつけようとする。子供の頃からタバコを吸ってる感じの小柄な男だったが、更に小柄な明日香に逆らえる相手じゃなかった。

周囲は事の成り行きを最初と同じように遠巻きに見ていた。眉を顰める向きはあったが誰も止めに入ったりしない。盛り場の揉め事に口を差し挟むほど中洲の住人は暇じゃないからだ。

アタシはやれやれと思いつながらクレイン・ゲームの前から離れた。狙っていたものがどうしても取れなくてイラついていたのもある。

「あんた、何しよう？」

驚いた男がアタシの方を振り返った。その瞬間、アタシは男の顎に渾身の掌底しようてい

を叩き込んだ。明日香は何が起こったのか分からないように目を瞬かせていた。

「え、あの、その……」

「ボーっとしとらんで逃げるッ!!」

ところが、腕を捻られたときに取り落としたバッグがちょうど男の身体の反対側に転がっていた。そんなもの放つとけと言いたいがそういう訳にもいかない。

しかも男はノロノロと立ち上がり始めていた。派手に鼻血を吹いているがダメージはそうでもなさそうだった。掌底で顎を狙う場合は下方向から打ち上げるとうまく入るが、相手が小柄だとどうしても打ち下ろしになってしまう。そのせいでノックアウトできなかったのだ。

男は鼻血を袖でグイッと拭くと、ジャケットの内ポケットに手を突っ込んだ。息苦しそうに口で呼吸をしている。

「ぐそっ、貴様

きさん

、ぶっ殺すッ！」

そうはいくか。

ポケットから出した手に鈍く光るものを認めた瞬間、アタシの体は動いていた。左の下段前蹴りで男の出足を止めて、その脚を下ろさずに横蹴りでナイフを蹴り飛ばした。男は蹴られた腕を押さえながら後ろへ下がった。

転がるような勢いで男はゲームセンターから中洲の表通りに飛び出した。助けを呼ぶのかもしれない。さっさと片付けないと面倒なことになる。

アタシも後を追って外に出た。通りを行き交う人々の驚きの視線を感じたが気にしている余裕はなかった。アタシはもう一度、左の下段で男の脚を狙った。位置的な関係もあるがアタシは相手に近い左ばかりを使っていた。それは決め技への伏線だった。

男がアタシの左の届かない右側へ動こうとした。その刹那、アタシは軸足をスイッチして右の上段回し蹴りを放った。

とっさに腕がガードに跳ね上がったのは褒めてやってもいいかもしれない。しかし、アタシの前では無意味だった。膝をたたんだまま振り上がったところで腰と軸足を返し、ガードの上から力いっぱい脚を振り下ろす。

アタシの得意技、軌道の変化する上段縦蹴

じょうだんたてげ

り グラウベ・フェイトーザばりのブラジリアン・ハイキックが男の肩口にめり込んだ。

「ぶぐツツ！！」

不気味な悲鳴とともに鎖骨が折れる感触が伝わってきた。男は肩を押さえて座り込んだ。

誰かが吹いた口笛で、アタシは我に返った。

いつの間にか周りを囲んでいたギャラリイは思わぬ見世物に大興奮だった。しかし、その向こうにいかにもという感じの剣呑な雰囲気

気を漂わせた若い男たちの姿が見えた。

「早く逃げよっ!」

誰かがそう言っアタシの手を取った。

明日香だった。さっきまでの可愛らしい表情は消えていて、有無を言わせない力強さでアタシを引っ張った。アタシたちは脱兎のようにその場から逃げ出した。

インターハイに“四〇〇メートル逃げ足”という競技があったらブッチギリで優勝できそうな勢いで逃げ出したアタシたちは、那珂川なかがわ

に架かる福博であい橋 ホークスが優勝するとファンがダイブすることでも有名な橋 の袂まで来たところで足を止めた。

息を整えながら追ってくる気配がないことを確かめて、アタシは橋の欄干にどっかりと身体を預けた。

川辺に立ち並ぶビルの屋上のネオンが水面に映り込むテレビや雑誌でお馴染みの風景は幻想的で、見る者を惹きつける華やかさと猥雑さを併せ持っている。光に照らされたところの美しさと、その陰にある暗い闇が持っている別の意味で人の心を捉えて放さない力。

アタシは自分がここにいることの現実感のなさにしばし呆然とした。

「 玲央って強いっちゃんえ」

明日香はいきなりアタシを呼び捨てにした。彼女にはそういう細かいことを気にしないようなところがあつたし、アタシもそういうことにそれほど煩いわけでもなかった。

「つーか、なんでアタシの名前知っとうと?」

「みんな知っとうよ。有名人やもん」

「……ま、そうやけどね」

それなりに時間が経ったおかげで、父の事件とアタシをすぐに結び付けられる人間は確実に減っている。けれど、それでも人の口には立てられない。おまけにアタシは前の高校を辞めて今の高校に

移る間、学校に行っていないせいで一年留年している。ただでさえ珍しい編入生がダブリとなれば物珍しい視線を浴びせられても仕方がない。

続きは“有名人”への不躱な、そうじゃなければ腫れ物に触るような質問を浴びせられるのかと思った。しかし、明日香の質問は違っていた。

「あれ、何ていう技？」

「どれ？」

「あいつをやっつけた脚を高く上げるやつ」

「上段縦蹴り。ブラジリアン・ハイキックともいうっちゃけどね。」

グラウベ・フェイトーザって知っとう？」

答えの前に彼女の表情で知らないのが分かった。まあ、一時期ほどK-1にも出てないのでアタシも最近は見えていないが。

「すごいっちゃね。あたしにはとてもやないけどムリ」

ついさつき危険な目にあっただとは思えない明日香の無邪気な口調に、アタシは呆れるのを通り越して笑い出しそうになっていた。

「変わっとうね、あんた」

「……そう？」

それから、どちらともなく「お腹すいたね」ということになった。

明日香がいい店を知っているとついで、橋を渡って警固
けこ

まで歩いて、今泉公園の向かいにある洒落たカフェに入った。こんな夜中に女子高生の二人組なのを見咎められるかと思ったが、アタシは元々女子高生には見えないし、それ以前に明日香はこの店では顔馴染みらしく、少し顔をしかめられただけで何も言われなかった。アタシはコーヒー、明日香はアップルタイザーを頼んだ。食べるものは明日香が適当にオーダーした。

何となく来てしまったものの、何を話せばいいのか、アタシは困惑を隠せなかった。こんな感じで誰かと食事を共にするなど久しぶりだったからだ。

一方、興奮していたのもあつただろうけど、明日香は本当によく笑った。

夜の街で遊ぶようになってから、アタシは人が浮かべる笑顔と、その裏側で浮かべている違う種類の笑顔について無闇に敏感になっていた。

明日香はアタシの身に起きたことも、アタシがどんなに荒れた生活を送っているのかも知っていた。特に隠しもしないし、興味本位で訊いてくるクラスメイトに相手が気ますぐなるほど詳しく話して聞かせたこともあるからだ。そして、そういう人間とは疎遠になるのが常だった。

明日香は妙な気遣いをするでもなく、ありがちな同情も見せなかった。ただ、優しく笑いかけてくれただけだ。そして、そんな笑顔を向けてくれる人間はアタシの周りにはいなかった。

店を出てから、アタシはタクシーが拾えるところまで明日香を送った。

別れ際、明日香は静かな声で「助けてくれてありがとう」と言った。アタシは何と返事していいか分からなくて、ただ「……うん」とだけ答えた。

3 . h e r b r o t h e r

翌日、明日香は学校に現れなかった。

彼女が「アタマが痛い」だの「気分が悪い」だのと言って前触れもなく休むのはそんなに珍しいことじゃない。実際のところはどうか知らないが、学校では身体が弱いことで通っている。それに彼女は本来補習を受ける必要はないのだから、来なくても何も問題はない。

ただ、昨日の別れ際に明日香は「明日、テストの前にもう一回おさらいするけんね!」と頼んでもいないのに一人で意気込んでいた。そして、意外なことに　と本人に言うともくれるけど　明日香は律義な人間で、その手の約束は滅多に破らない。

……何やってるんだかな。

アタシは終わった小テストを裏返して、昨日と同じように澄んだ青空を眺めた。

昨日はスタバで一服した後、キャナルシティまで延々と付き合わされた。見た目と違って堪忍袋の緒が長いアタシもさすがにぶち切れそうになったが、小テストの対策を伝授されるまでは我慢するしかなかった。

というのも、アタシの様子はOG会の関係者　担任もその一人　を通して、逐一、長崎へ報告されているのだ。叔父叔母にしてみれば厄介事さえ起こさなければそれでいいので、アタシの成績が悪かろうが授業態度が横着だろ何が何も言われたりしない。アタシも彼らの顔色を伺う気などさらさらない。ただ、最近祖母の具合が良くないという話が伝わってきていて、無用な心配をかけない程度

には普通を装っておく必要があったのだ。

勉強するにあたって、明日香はいつものようにアタシの百道浜ももぢまのマンションに来たがった。アタシはいつものようににべもなく断った。

えー、なんでダメと？

初めて断られた訳でもなくせに、明日香はわざとらしく抗議の声を上げた。アタシは無視。理由を説明すると毎回言われるが面倒を装って答えない。

あのマンションはアタシにとって家じゃない。引き取りたくはないが捨てる訳にもいかない野良犬にあてがわれたただの檻だ。そんなところに誰を呼べるというのか。

軽い押し問答の末、どこかの店に入ることになった。静かに話ができ長時間いられるところという条件を満たす店はあまりなく、アタシたちは天神イムスIMSの上層階にあるカフェテラスのテーブルに陣取ることにした。Terrassa という微妙な造語の店名には明日香と顔を見合わせて苦笑いした。

「そうやって、いつも笑ってとつたらいいとに」

明日香は少しだけ影のある微笑を浮かべた。

「悪かったね。仏頂面は生まれつきよ」

「そんなことないよえ」

「ある」

「ない。絶対、そんなことない」

そう言われても何と答えようもなく、アタシはぶっきらぼうに「さっさとするよ」と言った。

授業が終わると数学教師が恐る恐る声をかけてきた。

「あのお、栗原さん、佐伯さんは……」

「知りません」

「仲、いいんでしょう?」

「それなりですけど。でも、彼女は補習に出なくてもいいんじゃないんですか?」

「そうなんですけど……」

何ゆえに教師が生徒に敬語で媚びなきやならないのか。聞いていて虫唾が走るがわざわざ文句を言うことでもない。アタシの雰囲気ですこれ以上会話を続けられない方がいいことくらいは分かるらしく、彼女はおどおどと何か呟きながら教室を出て行った。

おかげ様で補習の延長は何とか免れそうだった。出題範囲は一緒だし、問題も数式や数値が微妙に変えてあるだけだったからだ。明日になったら解けなくなっているだろうが、そんなことはどうでもよかった。

それにしても明日香だ。具合でも悪くなっただらうか。

だが、こういつとときに気になるからといって、迂闊に彼女の家に見舞いの電話をかけたたりするのは危険だったりする。

彼女と話すようになってすぐの頃、同じように休んだ彼女の家にお見舞いの意味で電話をかけたことがあった。

ところが明日香は学校に行っていることになっていて　まあ、要するにサボリだ　彼女の母親に怪訝な応対をされたことがあるのだ。学校をサボることにかけては専門家であるアタシはとっさにその辺りのことを察して事なきを得たのだが、あとで明日香から膝を突き合わせてこっそり説教される羽目になった。大半は右から左に聞き流したが。

とりあえず携帯電話を鳴らしてみたが、お決まりの　電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため　というメッセージを聞かされただけだった。

さて、どうしたものか。

一時間後、アタシは平尾浄水の明日香の自宅の前にいた。

百道浜から平尾浄水までは城南線じょうなんせんを通ればすぐで、バンディットの試運転には物足りない距離だ。ただ、いきなり郊外に走りに行つて壊れたら身動きが取れなくなる。馴染みのバイク屋の親父に電話してキャリアを寄越してもらつた拳句、「整備いっちょ満足にできんとかッ！」と叱られるのは願ひ下げにしたい。その意味では妥当なテストランだった。

中央区と南区の境にある平尾の丘陵地は、古くから福岡の高級住宅地として知られている。

平尾浄水はその頂上付近の一画で、目の前には福岡市動植物園がある。アタシが住む百道浜も高層マンションが立ち並ぶ福岡で屈指のお高いところだが、浄水通りを下れば街中まですぐのロケーションでありながら静かで緑豊かというのはちよつと羨ましい。

場所柄もあつて明日香の家は敷地はそれほど広くないけど、煉瓦色の外壁と背の高い生垣に囲まれたモダンな洋館だった。

斜面に建っているので道路に面したところは半地下のガレージになつていて、その脇を上がっていく階段の先に門扉がある。ガレージの上も部屋になつていて、その窓の一つのカーテンレールにウチの学校の制服らしき半袖のブラウスが架けられているのが見えた。

明日香の部屋だろう。アタシなら抜け出して遊びに行けと言われているのと同じだが、運動神経の存在を感じさせない明日香に足場のない窓から下まで飛び降りるのは無理だ。まして、帰つてきてから部屋までよじ登ることなどできる筈もない。

明日香が家にいるかどうかは確かめていなかった。あれから何度か携帯電話にかけてみたけど繋がらなかったのだ。

しかし、だから家を訪ねてみようと思うのはアタシにしては珍しいことだ。どうしてそんな気になつたのかは自分でもよく分からない。理由があるとすれば夕べ、別れた後に明日香から届いたメールのせいだ。

今日は楽しかったよ。ありがとう

たったそれだけ。件名すらなかった。

明日香がメールを送ってくることで自体は珍しくも何ともない。本当に誰とでもやり取りしているし、アタシにもしょっちゅう送ってくる。アタシが長い文面だと面倒くさがって読まないことを知っているので、一方的な連絡メモのような内容のものばかりだが。

だからこそ、昨日のようなわざわざメールする必要がないものは珍しかった。これでただ思わせぶりなだけだったら、それこそ落とし前をつけさせなくてはならない。

バイクを前庭に停めて、門扉に続く階段を上り始めようとしたとき、横のガレージのシャッターが開く音がした。

ガレージは車が三台横並びに止められる広さだった。大型の4WDを入れるには天井が低いけれど、並んでいる車はどれもセダンタイプなので問題はない。階段から見ると奥からシルバーのメルセデス・ベンツ、赤いフォルクスワーゲン・ゴルフ、ダークブルーのBMWのステーションワゴン。

ガレージの奥で扉が開く音がして、せわしない歩調で出てくる若い男の姿が見えた。

「……あれっ？」

突っ立っているアタシに気付いて男はぎょっとしたように目を見開いた。しかし、それはすぐに柔和なものに変わった。アタシは小さく頭を下げた。

「こんにちは」

「こんにちは。明日香の友だち？」

「はい。彼女いますか？」

男は返事をせずにアタシの頭から足先まで視線を往復させた。遠慮はまったくなかったけど不思議と不快な感じはしなかった。それはこの男が漂わせている雰囲気のせいだ。

明日香もどちらかといえば丸顔だけど、それとは違ういかにもと

いう感じの愛嬌のある丸い顔。くつきりした二重瞼の大きな目は目尻が垂れているし、鼻は本物の団子鼻。いわゆるアンパンマン顔だ。短い茶髪をワックスで逆立てているので子供っぽさが控えめになっではいるけど、これでナチュラルな黒髪だったら文字通りのとつちやん坊やだろう。半袖のサマーニットとスリムジーンズから鍛えているらしい身体の線がくつきり浮かんでいて、首から上と下ではまるで別人に見えた。

「明日香は出かけとうみたいやけど……。約束しとったと？」

「いえ、そういう訳じゃないんですけど」

「携帯電話にかけてみた？」

「みました。繋がりませんでしたけど」

「そっか……。僕もさっき帰ってきて、また出かけるところやけど。

明日香とは……。もう何日も会うとらん」

「そうなんですか。あの……。お兄様ですよね？」

男は面食らったように目を瞬かせたが、すぐに少しおどけた笑みを浮かべた。

「……。様”をつけられるほどの者でもなかけどね。兄の祐輔ゆうすけです。

君のこと明日香から聞いたとよ、栗原玲央さん」

「アタシのことを？」

「うん。すごく仲が良い、背の高い綺麗な子がおるって」

佐伯祐輔はごく自然に右手を差し出してきた。暑苦しい体育会系にはたまに誰彼構わず握手したがる奴がいるが、目の前の男がそうするとは思っていなかったのでアタシは面食らった。それでもぎこちない握手は交わした。

「しっかし明日香の奴、何しようとかいな」

祐輔はやれやれという感じで顔をしかめた。それでも人の良さそうなおところは変わらない。

「家には誰もおらんけん伝言もできんしね。置き手紙でも残しとったか？」

「いえ、そこまでしなくても」

ただか今朝から連絡が取れないだけだ。約束をすっぱかされた理由は気になるが、そこまでする必要はないだろう。

「後で会うたら、君が訪ねてきたって伝えとくよ」

「よろしくお願いします」

それ以上、何も言うことはなかった。祐輔がBMWに乗り込むのを横目に見ながら、アタシはバンデイトのエンジンをスタートさせた。

4 . p o k e r f a c e

明日香の自宅を訪ねてから天神でしばらく時間をつぶしたが、無趣味なアタシは街にいてもすることがない。仕方がないので早めにアルバイト先に顔を出すことにした。

アタシがアルバイトをしているフィットネスクラブは今泉いまいずみの入り組んだ一画にある。国体道路から少し入った路地裏で、周囲はマンションや雑居ビルばかりのロケーションだ。こんなところに通ってくる物好きがいるのかと思っていたが、聞けば福岡のフィットネスクラブでは老舗の部類に入るのだそうだ。

本来、アタシはアルバイトをする必要がない。長崎から振り込まれる金額がそこの社会人の給料より多いというのもあるが、それ以前に相次いで亡くなった母方の祖父母には子供がアタシの亡き母親しかおらず、その財産はすべてアタシが相続している。こう言っちゃなんだが、アタシはちよつとした資産家なのだ。

そして、こんな境遇になる前は父親と官舎で二人暮らしだったせいで、贅沢をする生活習慣がまったく身につけていない。服は大半がユニクロかコムサ、たまにGAP、気が向いたらZARA。要するに安物ばかりだ。中学生の頃から家事一切を取り仕切ってきたので自炊が苦にならず、外食も滅多にしない。CDやDVDはよほど気に入ったもの以外はレンタルで済ませる。本や雑誌もできるだけ立ち読みで済ませてほとんど買わない。

そんな中でアタシがアルバイトをしているのは、バンデイトの維持費とガソリン代くらい自分で稼ぎたいからだ。何年も前に生産が終わった旧車はとかくメンテナンス費用がかさむ。燃費もお世辞にも良いとは言えない。

つまらない意地だというのは分かっている。けれど、そこをなし

崩しにしたらアタシは誰にも何も言えなくなってしまう。

タイムカードを押していると支配人が後ろを通った。三〇代半ばにして小太りの洋梨体型はフィットネススクラブの人間として如何なものかと思うが、当の本人は気にしている様子もない。

「おはよう、玲央ちゃん。こがん早うどうしたと？」

「家にいてもすることないんで。プール入ってもいいですか？」

「いいけど。でも、花の女子高生が夏休みにする事なかとか、勿体なかねえ」

「花なんかいいですよ」

「またまたあ」

支配人は笑いながら去って行った。何がまたまたなのやら。

水着に着替えにスタツフルームへ向かった。スタツフ特典として空いている時間帯であればプールやジムなどの施設を無料で使わせてもらうことができるのだ。アタシがアルバイト先にここを選んだ理由の一つでもある。

アタシたち学生には夏休みでも世間一般では平日の午後だ。有閑マダムでゴった返すエアロビクススタジオを除けば館内は閑散としている。プールも一番端のレーンでひたすら歩いている年配の会員さんくらいしかない。

ずっと昔、アタシはここで一人の男の子とデートみたいなことをしたことがある。アタシが通っていた道場に入門してきた子で、ある事情があつてずいぶん焦って強くなりたがっていた。行きがかりでアタシは彼のコーチのようなことをしたのだけど、その時に気分転換を兼ねてここに連れてきたのだ。当時、アタシの祖父の会社がこの法人会員だったのでカードを借りられた訳だ。

あの頃、アタシの胸はぺったんこで水着姿を晒すのにはかなり勇氣が必要だった。あれだけコンプレックスだったのに、どうしてあんなことが出来たのか。今でも謎だ。

プールサイドのマットの上でストレッチに取り掛かった。

「……ん、しょっと」

「あら、どうしたと？」

プールサイドの女性スタッフが声をかけてきた。アタシはに軽く頭を下げて応えた。

「ちよつと身体がなまってるんで」

「玲央ちゃんが？」

「学校で補習ばかりで運動不足なんです」

「あたしもそうやったあ」

彼女は朗らかに笑った。アタシも少し伏し目がちに笑みを返した。こうすれば作り笑いがバレなくて済む。

ここではアタシは“学校に内緒でバイトしているごく普通の高校生”で通っている。

素性を知っているのはクラブのオーナーと紹介してくれた爺イくらいで、スタッフはもちろん、支配人も詳しいことは知らない。なので、誰もアタシを疎ましげな眼で見たりしない。気軽に声をかけてくれたり、時には飲み会やご飯に誘ってもらえたりもする。

ふと、それに奇妙な罪悪感を覚えることもある。不意に「アタシの父親、殺人犯なんですよ！」とぶちまけたくなる暗い衝動に駆られる。今はかろうじて自分をごまかす術を身に付けたが、最初の頃は特にそうだった。そんなことをしても何にもならないのに。

一通りのストレッチをしてプールに身を沈めた。ゴーグルを引き下ろしてゆっくりと背泳ぎで泳ぎ出した。

アタシは泳ぐときにあまり考え事をしない。真つ白なプールの天井にできた薄いシミや天窓から差し込む光を眺めながら、ただゆっくりと身体を動かすだけだ。この無心になれる感じが好きで、最近ではスタミナ維持をランニングよりも泳ぐことで賄おうとする傾向がある。

途中で平泳ぎに変えて何往復かしてから、再び背泳ぎに戻った。時折、プールサイドの壁にある時計に目をやる。アタシは何メートル泳いだかよりは何分泳いだかを重視する。いちいち数えてなどいられないし、ペースを守って泳いでいれば結局は同じくらいの距離

になるのだ。

一時間ほど泳いだところでプールから上がった。タオルで髪を拭いていると見学用のブースの扉が開いて、作務衣姿の年寄りが入ってきた。

工藤幹康くどうみきやす アタシの父親が駆け出しの刑事だった頃の上司。アタシにこのクラブを紹介してくれた人間でもある。道場を辞めさせられた後の空手の師匠でもあるのだけど、アタシはこの爺イに何一つ技を教わった覚えがない。

「なんや、来とつたとか」

爺イはアタシをじろりとねめつけた。しわだらけの浅黒い顔に白髪ナベサダのオールバック。白麻のスーツにパナマ帽をかぶってサックスを
持てば渡辺貞夫そっくりだ。背が低いことを除けばアタシの祖父に似ていないこともない。

「来とつたら悪かと？」

「誰もそがんこと言うたらんやろうが。来とるなら顔くらい出せて
言いよるだけだいたい」

「別に悪かとかなかもん」

「嘘つけ。左肩が落ちとるぞ。背骨が少し曲がつとうせいか」

「……そがんと、パツと見ただけで分かるか？」

「分かるに決まっとうももん。脳みそに行かなん栄養がぜーんぶ乳
に回っとうこともな」

「どこ見ようと、このエロ爺イ」

このクラブには一階に併設の整骨院があつて、爺イはそこで雇われ院長をしている。空手家が柔道整復師じゆどうせいふくしの資格を持っているというのも何だか変か感じがするけど、現代の柔道や柔術だって整復術と直接の関係はないらしい。

「仕事終わつたら来い。診てやるけん」

爺イは不機嫌そうに言い捨てて、くるりを踵を返した。

アタシの仕事はいわゆるアシスタントスタッフで、スタジオレッスンで使う用具の準備や片付け、会員さんからの問い合わせや苦情の対応、清掃のおばちゃんの手が回らないときはその手伝い、時にはジムに並ぶマシンの使い方を説明する際のお手本など、本当に多岐に及ぶ。

そして、フィットネスクラブは休日やその前日より平日の夜の方が忙しい。一部の筋トレマニアを除けば、遊びに行く予定を返上してまで体を鍛えようなんて思わないからだ。

その日も結構忙しかった。しかも清掃のおばちゃんの一人が休みで応援に入らなくてはならず、アタシはフロアモップを片手に館内を走り回る羽目になった。男性更衣室に入っているいいものか、ずいぶん悩んだけど仕事だからと割り切ることにした。幸いにも　　言っているいかはかなり疑問だが　　父親は年頃の娘の前を平気で裸で歩き回る人間だったので、アタシは男の裸にはそれなりに耐性がある。むしろ若い男性客が所在なさげだったのが気の毒だった。

「ぶへえ、疲れた……」

アタシは施術用のださいジャージ姿でベッドに倒れ込んだ。爺いはふんと鼻を鳴らすだけだ。

「いい若いモンが何を言いようとか」

「若くたって疲れるって。さっさとやって」

「金も払わんくせに態度だけでかかなあ。背骨は押せば治るばってん、性根が曲がっとうとは治らんぞ」

「せからし、こんクソ爺イ」

口は悪いが腕は確かな爺イの施術、ついでに指圧と鍼まで打ってもらって身体はずいぶん軽くなった。十八歳でマッサージ後のまっ

たり感を心地よいと感じるのはいろんな意味で危険な気がするが、気持ちいいものは仕方がない。

自分の服に着替えて、熱いコーヒーを啜りながらソファで休んだ。インスタントではなく豆から淹れた渋みが効いたサントス。ちゃんとアタシが淹れた。アタシは大のコーヒー党だけど、それはこの爺イの影響によるところが大きい。

テレビの夜のニュースを眺めながら明日香の携帯電話を鳴らしてみたが、相変わらず繋がる気配はなかった。

「友だちか？」

爺イは椅子にどっかりと腰をおろしてタバコを吹かしていた。タコのように口をすばめて煙を吐き出すと急に顔が年寄りくさくなる。くさくなるも何もとつくに七十歳を超えているが。

「そうやけど、なん？」

「……いちいちつかかるな。子供かおまえは」

「子供やもん」

「やったら、もうちょっと素直にならんか」

爺イはそれ以上何も言わずにテレビに向き直った。

たった一日連絡が取れないだけで、アタシは何を心配しているのだろう。

明日香にもアタシ以外の誰かとの用事があるし、それをいちいちアタシに断る必要などない。電話に出たくない気分するときもあるだろう。アタシだって気分が乗らないときにコールを無視するのは珍しくない。

「……帰る」

立ち上がると爺イがアタシの顔を見上げた。

「腹減つとろ。屋台でラーメンとかどがんや？」

「食欲ない」

「具合が悪かとか？」

「アタシにだってそがんとときがあるよ」

アタシは小声でお休みを言って外に出た。

日付はすでに変わっていて、辺りはすっかり静まり返っていた。表通りを行き交う車の音が微かに聞こえてくるくらいだ。裏通りには人影もない。

星と羽根を大胆にあしらった阿部典史あべのりふみレプリカのヘルメットを被って、バンディットのシートに跨った。ノリのいい音楽を聴きたい気分だったが、さすがにバイクに乗るときにイヤホンなんか突っ込めない。駐輪場から路上に出て、セルモーターのスイッチを押した。エンジンはかからなかった。

「うっそやる……」

押しがけにチャレンジすることも考えた。けれど、そうするにはアタシの気力は少しばかり足りていなかった。諦めてバンディットを元の場所に戻した。

中に戻ると爺イの怪訝そうな眼差しが待っていた。

「帰ったつちやなかつたとか？」

「バイクが壊れたと。家まで送ってくれん？」

「……片付けが終わるまで待っとけ」

後片付けには何だかんだで一時間ほどかかるらしかった。

手伝ってもいいのだけれど、爺イが「何もせんでいい」と言うので手は出さない。自分の道具や居場所を他人にいじられるのを好まないタイプなのだ。無理に手伝いたい訳でもないので放っておくのが常なのだ。

アタシは椅子から立ち上がった。

「ちよつとその辺、歩いてくる」

「構わんばってん、戻ってきたときには閉めとるかも知れんぞ？」

「そんなときは家に行く」

爺イの自宅はクラブのすぐ近くなので通勤は徒歩だ。送ってもらうにはどうせ家まで行かなくてはならない。

「夏休みやけん、愚連隊ぐれんたいんごたるとがウロウロしてる。気をつけるよ」

「誰に向かって言いようど？」

呆れたような視線に見送られてアタシは整骨院を出た。

その途端に熱の塊にでもぶつかったような気分になった。少しは気温が下がっているとはいえ真夏の夜だ。一瞬、冷房が効いた院内に戻ろうかと思っただが、そんなみつももないこともできない。

国体道路は福岡中心部の東西の幹線道路で夜になっても交通量は多い。

その南側に広がる今泉は大名《大名》や警固けしとひつくるめて南天みなみて神と呼ばれている。一昔前は繁華街近くの普通の住宅地で民家やマンション、せいぜい雑居ビルがある程度の夜になると真つ暗な地域だったそうだが、今は安い賃料と福岡の中心地のすぐそばという立地に惹かれてカフェや居酒屋、バーなどが増えている。いわゆる激戦区つてやつらしい。

それでも大名なんかには比べると全体的にこじんまりしていて、深夜になると人通りもそんなに多くない。地区の中心は今泉公園という三角州のような形をした小さな公園だけど、その周りも人影はまばらだ。今日が平日というだけじゃなく昨今の不況の影響もあるのだろう。会社を経営してるらしいおじさんたちがクラブの更衣室のため息混じりにそんな話をしていた。

アタシは人っ子一人いない公園のベンチに腰をおろした。

公園を囲む木々のむやみな背の高さといい、住民への配慮からかあまり明るくない照明といい、辺りには女性の夜の独り歩きに向かない雰囲気満点に漂っている。アタシは気にしない方だが、たとえば明日香などは怖がつてまともに歩けないだろう。

まあ、今泉公園周りが静かなのはそれだけが原因じゃないけど。

今泉にはもう一つ、ラブホテル街という顔があるのだ。公園周辺をぐるりと見回すだけで五、六軒のネオンサインが目に入る。繁華街のすぐ裏手なので徒歩の客が多いのも今泉の特徴だ。カップルだけじゃなく、どう見てもデリヘル嬢としか思えない格好の女がそくさと入っていく姿も見る事ができる。当然、同じ数だけ一人でホテルに入る男がいる筈なのだけど、不思議なことにその姿はあま

り目につかない。

アタシはポケットからiPodを引っ張り出してイヤホンを耳に突っ込んだ。

いつものようにシャッフルで再生をスタートさせる。流れ出したのはB'zの今夜月の見える丘に だった。明日香が勝手に入れた曲だ。

いつだったか、明日香が「玲央、ちょっとiPod貸して」と言うので深く考えずに手渡したことがある。

(何すつと?)

(いいからいいから。玲央は洋楽ばかりやけん、たまには違つと聴いてみん?)

(J・POPは趣味やなつて。変なの入れんでよ)

(ダメ?)

(当たり前やん。入れた分は消すけんね)

(……わかつた)

しかし、返ってきたiPodにはB'zのベスト盤が丸ごと転送されていた。しかもベスト盤は何枚もあるらしく曲数はかなりに及んだ。

(ちょっと、何しよう?)

(えへへ、あたしのお薦め。食わず嫌いはダメよん)

最初は聴かなければいいだけだと思っていた。ところがシャッフル再生するとこれらも当たり前のように対象に入ってくる。何曲も興味がないミュージシャンが続くとなると、いくら我慢強いアタシでも腹が立ってくる。

だったら、宣言どつりに消せば済む話ではある。

実際にそうしようとしたのだ。しかし、頬をはち切れんばかり

に膨らませて抗議してくる明日香の前に、アタシは実行を思い留まっていた。

自分の持ち物なのに他人の顔色を伺わなくちゃならない理由はハッキリ言って謎だ。渋々でも明日香の言うことを聞いてしまう理由も。

空を眺めたが、月なんか出ちやいなかった。

6 . beauty and the beast

それから、どれくらいそこに座っていただろうか。

ジジイがいうところの愚連隊らしき連中も現れず、アタシの興味を引くような通行人も現れなかった。公園の正面のホテルに運ばれてきた小太りのデリヘル嬢がアタシを見つけて訝しげにガンを飛ばしてきたが、これはアタシだからというよりは誰にでもそうしているような慣れた目つきだった。決して安くない　筈だ、たぶんカネを払ってこんなのに当たる男に同情するべきかどうかは微妙なところだ。

iPodの画面に視線を落とした。

八曲聴いたうちの四曲がB'z　愛のままにわがままに僕は君だけを傷つけない　今夜月の見える丘に　LOVE PHANTOM　さまよえる蒼い弾丸　だった。残りのはボン・ジョヴィのRunawayと土岐麻子がボサノヴァ風にカバーしたEW&FのSeptember、ELLE GARDENのSalamander、ベルリン・フィルハーモニー演奏によるワグナーのワルキューレの騎行。統一性のなさには自分でもちよっと呆れる。

携帯電話の画面を見ると三〇分ちよつと過ぎていた。片付けもそろそろ終わったことだろう　と思ったらジジイからメールが入っていた。

終わった。帰る

メール短文主義のアタシでさえもうちよつと可愛げのある文章を書く。外国人の片言会話のほうはまだマシだ。

携帯電話とiPodをデニムのポケットに押し込んだ。

学校に行く時を除いて、アタシは基本手ぶらだ。財布はデニムの尻ポケット、携帯電話とiPodは前のポケット。バイクのカギはカラビナでベルトに留める。明日香のようにメイクがどうこうなどと言わないので、持ち歩くのがせいぜいその程度だからだ。あつたとしても冬のリップクリーム。どうしても必要な時は革のシザーバツグをベルトに通す。

手持ちのバツグを使わないのはあちこちに置き忘れるからでもある。こんなところが似なくてもと思うが、父親とまったく同じ癖を受け継いでいるのだ。アタシがバツグを持つのはよほどの大荷物の時か、滅多にないけどスカートを履くときくらいだ。しかもそれらはすべて自分の意思で買ったものじゃない。

公園の外に歩きながらジジイの携帯電話を鳴らした。

「玲央か？」

「アタシ以外誰がおるとねって。もう家に着いたと？」

「さっきな。今、セブンの暖気をしとる」

ジジイの愛車はケーターハム・スーパーセヴンという、古いレーシングカーのようなシルエットのオープンカーだ。乗り心地も居住性も最悪で運転している人間だけがとんでもなくワクワクするという、如何にも趣味人の車だ。エアコンなんて軟弱な装置はついてないので、夏はやたら温かく冬はとんでもなく涼しい。

「今からそっち行く」

「分かった。あ、済まんばってん、スーパーで買い物してきてくれるか。明日の朝飯がない」

「コンビニ弁当でよか？」

こんな時間にスーパーなど開いてない。いや、福岡にだって二十四時間営業のスーパーくらいあるが、今泉から歩いて行ける範囲にはないのだ。

警固方向に歩きだしていたのを逆戻りして公園前のファミリーマートに入った。

ちょうど商品の入れ替え前だったらしくて弁当の揃いは良くなかった。アタシが食べる訳じゃないのでどうでもいいが。和風であれば何でもいいだろうということで雑穀米を使った幕の内弁当を手にとった。

最近のコンビニの弁当は保存料や着色料を使っていないので身体に悪いことはないというが、アタシは死んだ母親の影響で今一つ手を出そうという気にならない。同じ理由でカップラーメンや冷凍食品も苦手だ。

他にジジイの好物のよもぎ餅や自分のコーヒーを買ってコンビニを出た。

今泉公園の外周フェンス沿いはパーキングメーターになっていて、こんな時間でも車が何台か停まっていた。ほとんどはメーターの未収ランプが点灯したままだが、それは当り前だろう。駐車監視員が廻ってこないこの時間に誰がまともに払うと言うのか。アタシだってぜったい払わない。

そんな車列に向かってカップルが歩いてくるのが見えた。さつき小太りのデリヘル嬢が入って行ったホテルから出てきたようだ。

アタシは何となく足を止めた。

男の方は走るより転がった方が速いんじゃないかと思える丸々とした体格だった。歩を進めるたびに胸やら腹やらほつぺたやらの肉が揺れている。横幅のせいであまり長身に見えないが身長はアタシと同じくらいに見えた。十一月に福岡国際センターの周りをうろついていたら新弟子検査に誘われること間違いなした。

変装のつもりだろうが、キャップを目深にかぶってウエリントン型のボックスフレームをかけているが、顔が大きいのでまったく隠しきれていない。顔の下半分をうっすらと髭が覆っていて、誰に似ているかと言えばアメリカの某ドキュメンタリー映画作家ということになるだろう。

服のセンスも似たりよったりで、PUMAのロゴとマークが入った黒いTシャツに半袖のタッターソルのシャツを上着代わりに羽織

っている。但し、どう頑張っても前のボタンは留まりそうになかったし、豊満な胸と腹に引き伸ばされて豹がダックスフンドみたいになっている。ボトムはウエストに合わせたせいで太腿がぶかぶかなのを除けば普通のチノパン。指抜きのレザーグラブとリュックサックがあれば昼の北天神をウロチョロしている連中そのものだ。手には何故かスポーツバッグを持っている。

一方、女の方は明日香が憎悪の視線を向けかねない典型的なギャルファッションだった。ショッキングピンクのＴシャツと豹柄のタンクトップの重ね着にボトムは裾が折り返しになったデニムのショートパンツ。形のいい脚は惜しげもなくさらけ出されている。足元はグラディエーター。男と違って大きな鰐がついた白いキヤスケツトと飴色の大きなサングラスで顔は隠れている。小柄な割にメリハリがある体つきだが、隣の大柄な肉団子のせいで子供のように見えしてしまう。

不釣り合いなカップルは世の中にくらでもいる。

振り返ればアタシの両親がそうで、母は黒木瞳似の美人だったけど、父はいつ悪役商会からスカウトが来てもおかしくない面構えの典型的な”美女と野獣”夫婦だった。

尤も最近では”美男と野獣”の組み合わせも少なからずいて、長崎の叔母とその再婚相手がまさにそうだった。やむを得ない事情で披露宴に出たが、何処のホストクラブで捕まえてきたのかと出席者の誰もが訝るほどだった。

それはともかく、ここまで不釣り合いなカップルもそうはいないだろう。二人の接点を想像することすら難しい。

二人が足を止めたのは白いシビック・タイプRの前だった。

どうせ街乗りしかしないくせにレーシング風のドレスアップがしっていて、ボンネットは黒いFRP製に換装されている。タイヤもフェンダーからはみ出すギリギリまでサイズアップしてある。車内には転倒時に乗員を守るためのロールケージの影まであった。まあ、あれにはただ棒状の部品を組み立てるだけの”なんちゃってロール

バー”もあるのだが。

そもそも何故こいつらは車をこんなところに停めているんだろう。二人が出てきたホテルは一階部分が駐車場になっているのに。バカでかい四駆ならお断りの可能性もあるが、シビックなら何も問題はない。車高が低めにセッティングしてあると言っても駐車場入り口の段差でボディの下っ腹を打つのを恐れる程でもない。

男はスポーツバッグをリアシートに投げ込むとさっさとシビックに乗り込んだ。女は助手席には回らずに運転席の横に立っている。窓が開いて二人は何やら会話を交わしている。

やがて、男が窓から何かを差し出した。

ハッキリとは見えない。しかし、四角くて薄っぺらいケースのようなのは分かった。CDかDVDだろうか。

女はそれをジッと見つめてから男に返した。男はしばらく迷うような素振りを見せたが、小さく肩をすくめて受け取ったケースをダッシュボードの上に置いた。

不思議な二人だった。ホテルですることをしてきたにしては漂わせている雰囲気の違いすぎた。親密な関係なのは見ているだけで分かる。それなのに二人はさっきからまったく笑顔らしきものを浮かべていなかった。

無論、赤の他人にそんなことは関係ない。アタシはさっさとその場を立ち去るべきだった。

しかし、時すでに遅しだった。運転席の肉団子が車から見て真正面に突っ立っていたアタシを見つけた。その視線につられて女もアタシの方を見た。

女はいつの間にかサングラスを外していた。

おかげでキャスケットは目深にかぶったままだが顔はハッキリ見えた。そしてアタシの視力は2.0だ。実際にはもうちょっと良いらしくて、健康診断を担当した学校出入りの女医のババアに「アフリカ人並みね」とまで言われたことがある。アタシを見つけて呆然とする女の表情まで見て取ることができた。

「……………どういうこと？」

アタシは手にしていた袋を取り落としそうになった。天神コアのマネキンが抜け出してきたような格好のその女が佐伯明日香だったからだ。

比喩として”微妙な距離”という言葉を目にすることがある。主に心情的な距離のことを言う時に使う表現だ。

今のアタシと明日香の距離は物理的に微妙だった。素知らぬふりや気付かなかったふりをするには近すぎた。しかし、いつものように話すには遠すぎた。

「……………あんた、何しよう？」

アタシはようやくその一言を絞り出した。明日香はまだ目を白黒させている。まあ、そりゃそうだろう。

「ま、玲央こそ何しよう？」

「何って……………アタシのバイト先、すぐそこ」

「……………あ、そっか」

また沈黙。

男はシビツクの運転席で明日香とアタシの間で視線を往復させている。アタシの声が聞こえていないのか、事態が飲み込めていないようにも見える。フロントウィンドウから見えるロールケージに囲まれた姿は、狭苦しいカゴに押し込められたパグ犬を連想させた。

「そいつ、彼氏？」

「う、うん……………玲央に紹介したら良かったね。加藤くん」

「あ、そう……………」

さて、こんなときアタシはどういう反応をすればいいのだろう。というか、アタシが何か言うべき場面なのだろうか。それすらよく分からない。

有体に言えばアタシはパニックを起こしていた。

明日香に彼氏がいたのがショックだったか。いや、そんなことはない。むしろアイドルでも通用しそうなルックスの持ち主である明

日香をオトコどもが放っていることの方が不自然だと思っていたくらいなのだ。

明日香の彼氏がマイケル・ムーアの出来損ないだったことか。いや、それも無い。率直に言って不釣り合いだとは思いますが、他人の好みに口を出す気はさらさらなかった。

だとすれば理由は一つしかなかった。明日香が彼氏の存在をアタシに秘密にしていたことだ。

(何ね、彼氏がおるならおるって言うてくれればいいやん)

心の中で呟いた。

そりゃ、ちょっとばかり公開するのに勇気が必要な相手かもしれない。だが、アタシは明日香が選んだ相手ならそれはそれでいいじゃないかと思っただろう。彼女が人を外見や噂で判断しないことはアタシ自身で証明されていることなのだから。

アタシは大きく息を吸い込んだ。

「どこで誰に出くわすか分からんっちゃけん、もうちょっと用心せんと。ま、そのための変装なんやろうけど」

「……うん」

いろんな感情が顔や声に出ないように努力したつもりだったが、だが隠し切れてはいないことも分かっていた。

明日香はそんなアタシに向かって何かを切り出そうとしているようだった。しかし、アタシはそんなチャンスを与えなかった。

「じゃあね。このことは誰にも言わんけん、心配せんでよかよ」

明日香は翌日も補習に顔を出さなかった。そして、週末になっても何の連絡もなかった。

何度か携帯に電話しようとしてみた。けれど、何度やっても最後の通話ボタンが押せなかった。

……ちえっ、何やってんだアタシ。

冗談めかして笑い飛ばしていれば良かったのだろうか。ひよっとしたらそうかもしれない。思いつきり冷やかしてやっていれば、そのときはいつものようにむくれたとしても笑い話にできたかもしれない。

でも、あの子の明日香はそれを許すような雰囲気じゃなかった。明けての月曜日、アタシは徐々に本格的な登校拒否を起こしそうになった。補習が今日と明日の二日間で終わりじゃなかったらそうしていたかもしれない。けれど、ここまで顔を出しておきながら最後の二日をサボって未修にする訳にもいかない。我慢して行くしかなかった。

アタシは明日香が学校に来ていないことを祈った。彼女は本来、補習を受ける必要などない。アタシに会いたくなければ来ている筈はないのだ。そう思って教室に入った。

ところが明日香はいつもと同じようにアタシの後ろの自分の席にいた。

さて、何と話しかけたものか。

数秒ほど悩んで、自分に小芝居を打つような器用なマネは出来ないという結論に達した。アタシは何事もなかったように自分の椅子にカバンを置いた。

「……おはよ」

憂いに満ちた眼差しがじっとアタシの目を見返してきた。それだけだった。彼女は一言も口をきかずに席を立った。

明日香はこれ以上ないほど鮮やかにアタシを無視した。

7 . choccorate disco

「セイヤアー!!」

丹田たんでんに意識を集中させて裂帛の気合を放つ。

小刻みなステップの中から左の中段を叩き込むとサンドバッグがゆらゆらと踊る。続けざまに右の上段。蹴り足を戻すと同時にそのまま後ろ上段回し蹴り。

大技の連続は見た目は派手だけどバランスを取るのが難しいし、勢いだけでやると最後の一発まできちんと体重を乗せられない。言い方を変えれば、あまり実戦的じゃない連続技にもそのあたりの感覚を養う効果がある訳で、アタシは左右を入れ替えながらこのセツトを繰り返す。

今度は右中段、左上段、左後ろ回し。最後の一発の高さが少し足りない。くそ。

「ふう……」

揺れるサンドバッグを手で押さえて大きく息を吐いた。

補習授業も無事に終わり、アタシにもようやく夏休みらしい日常が訪れていた。

せっかくなので、アタシは夜更かしして昼まで眠る生活を満喫するつもりだった。バイトは基本的に夜のシフトだし、自堕落な日常を送っていても誰からも叱られたりしない。お盆の親戚の寄り合いが一番上の叔父から先手を打って「帰ってこなくていい」と御達示があった。帰ってこいと言われても行かないけど。

それなのに自堕落生活はたった一日で終わった。代わりにアタシは毎日朝から南区の大橋おおはしくんだりまで道場通いをしている。

理由は”家で悶々と考え事をするのが嫌だから”という単純なものだ。

明日香に手ひどくシカトされた日から、早いもので一週間が過ぎ
ていた。

他人から背を向けられることには慣れてはいるつもりだった。父が
事件を起こした時に散々な目に遭わされているからだ。彼女が何が
気に入らないのかは引つ掛かるけど、最初から友だちじゃなかった
んだと思えば済むことだ。アタシが知っているアタシはそう思う
筈だった。

ところがあの日のアタシの行動は自分でも意外なものだった。ア
タシはまるで逃げ出すように学校を後にしていたのだ。

アタシが何か悪かことしたとねって？

逆にそう問い詰めてもいい筈だった。思い返してもアタシが非難
される要素なんか一つもない。あんなところで彼氏とヨロシクやつ
ていたのは明日香であって、アタシは偶然にその場に居合わせたに
すぎない。

なのに、アタシは未だに何もアクションを起こせていなかった。
慣れないメールを打とうとしても文面が思い浮かばないし、直接言
ってやるうとしても最後の通話ボタンが押せないままだ。終いには
手紙を書こうとレターセットを用意する始末だったが、アタシは自
分でも嫌になるほど字が下手なのであつという間に嫌気がさしてや
めた。

なんでこんな思いをしなきゃならないのか。あの時、アタシはど
うすれば良かったというのか。

考えれば考えるほど迷路にハマっていく。こっちが明日香に対し
て腹を立ててもいいくらいなのに、それもできないでいるのが現実
だった。そんなに明日香に嫌われたくないのか。

ふん、アタシもヤワになったもんだ。

呼吸を整えてから立つ位置を変えた。

サンドバッグを吊っている金具は天井のレールに架けてあって、レールの方向に沿って蹴ればバッグが移動するようになっていた。レールの端から端まで約六メートル。最初は三〇発近くかかっていたが最近は何とか十五発でいけるようになった。目指すは六発だがその境地は遥か彼方だ。

「フンッ！」

今度は一発一発しつかり力を込めて蹴っていく。その度にドスンという重い音が道場に響く。バッグが動く和金具がギシツという音を立てる。

「ずいぶん荒れとるの」

背後から声をかけられた。振り返るとジジイが道着姿で立っていた。一応、ここの道場主で周囲からは先生呼ばわりされている。

「……誰が？」

「おまえ以外の誰があるか。頼むけん、サンドバッグは壊さんでくれ」

「そこまでボロうなかるーもん」

吊り金具に錆が浮いているのが気にならないこともないけど、さすがにアタシの蹴りで干切れることはないだろう。

とはいえ、半年前に一つバッグを破った前科があるので大きなこととは言えない。元々傷んでいたのがたまたまアタシのときに限界を迎えただけなのだが、あのときは道場中から化け物を見るような視線を浴びる羽目になった。

「何か用？」

ジジイは腕組みをしたまま、溜め息をついた。

「用というほどのこともなかばってんな。学校で何かあったか？」

アタシは思わずジジイの顔をまじまじと見返した。

「何かって？」

「質問しとるのはわしぞ？」

「……別に何もなかけど。てか、何で学校でって言い切れると?」

「他に誰かと揉めるようなところに入りしとらんだろ」

「ひとを引きこもりみたいに言わんで。ホントに何もなければん」

「ならよかばってんな。　　そうそう、今度の能古島合宿やけど、

おまえだけ申込用紙が出とらんぞ」

「へっ?」

そういえば書いて出せと言われた紙を出してない。

ジジイが主宰するこの道場では毎年の夏休みに能古島のこのしまで二泊三日の合宿をやっている。

まあ、合宿とは名ばかりのサマーキャンプで、午前中は向こうの施設を借りて稽古をするけど、午後にはみんなで海に繰り出すのが恒例となっている。去年、半ば無理矢理参加させられたときはそうだった。なかなか揃うことのない門下生同士の親睦を深めるというのが本当のところらしい。

何が悲しくて顔馴染みでもない連中と博多湾のど真ん中で二泊しなきゃならんだ、というのがアタシの本音だ。特に道場の夜の部の連中はむさくるしい男ばかりで、こいつらが海でアタシの胸の辺りをジロジロと見まくるのだ。

別に見られたって減るもんじゃないが　　というか、少しくらい減ってくれてもいいのだが　　野郎どもの夜のオカズにされるのは遠慮したい。

「ねえ、パスしたらダメ?」

ちよいと小首を傾げてみる。ジジイは盛大に鼻を鳴らした。

「こついうときだけ可愛いふりするな。おまえは強制参加って何度言わせる?」

「……ふりって何だ、ふりって。

「何でアタシだけ?」

「おまえが行かんと、誰があの子らに稽古をつける?」

「まあ、そうやけど」

ジジイの視線の先には少年の部に属する中学生の女子たちがいる。

何が楽しくてこんなボロっちい町道場に来るのかよく分からないが、門下生には意外とこの年代の子が多い。しかも女子の割合が男子の1.5倍くらいいたりする。

ジジイに言わせると「道場主が人格者だから」ということらしいが、アタシに言わせると人格者は弟子の水着姿を眺めるために仕事をサボってプールに来たりしない。いつも偶然のような顔をしているが三度あったらそれは必然だ。このエロジジイが。

「とにかく、申込用紙はわしが書いてくぞ」

「へいへい」

くるりと踵を返したジジイに向かって思いっきり中指をおっ立ててやった。こつちを見ていた女の子たちがそれを見て一斉にくすくすと笑いだす。

「玲央？」

「何？」

ジジイが振り返った時にはアタシはすでに素知らぬ顔だ。おおよそ何事かは想像がついているのだろうが、ジジイはじろりとねめつけるだけで何も言わない。

「……玲央、一息ついたらあの子らの相手をしてやってくれ」

「はい」

それから小一時間ほど中学生の女の子の相手をして過ごした。

もちろん本気なんか出さない。というよりも出せない。自惚れるつもりはさらさらないけどアタシが本気を出したりしたら、彼女たちは楽しい夏休みの残りを病院のベッドで過ごすことになってしまふからだ。それもまた青春のページといえはそうかもしれないけど、アタシとしてはそんな形で他人の思い出に残りたくはない。

とはいえ、アタシの指導は結構厳しい。

「ほらッ、踏み込みが甘いって言いよろーがッ！ そんなやけん、蹴った時に身体が泳ぐったいッ！」

「なんね今の突きのぺちって音は！ 撫でようじゃないとよッ！」

「おまえらそこ、何くつちゃべりようよねってッ！ ぼてくりこかすぞコラッ！」

てな具合だ。好かれようとか仲良くしようとかいう気がないので言葉遣いは荒いし、割と平気で足を蹴ったり小突き回したりもする。それで門下生が減ったとしても、悪いのはアタシに指導をさせたジジイなので心も痛まない。

だいたい、アタシに空手を教えてくれた人 父親の指導はこんな生易しいものじゃなかった。幼心に何度「アタシは拾われた子なんだ」と思ったことが。

にもかかわらず。

「押忍！ 玲央さん、ありがとうございます！」

「ありがとうございます！！！」

「……おう、お疲れ」

稽古が終わると女の子たちはキラキラした笑顔であいさつして道場を出て行った。アタシはいつもどんな顔でそれで応じていいか分からなくて、口の中でもごもごと答えるだけだ。

「ずいぶん慕われてるねえ」

からかうように声をかけてきたのは少年男子を教えている工藤ジユニア 要するにジジイの息子だ。

この道場を主宰しているのはジジイだが、ジジイは整骨院に詰めていることの方が多いので責任者は息子が務めている。なので、この人には館長という肩書がついている。

思わず三白眼で「あ？」と言いつ返しそうになったが、これでも年長者に対する言葉遣いくらいいwijkまえている。

「何がですか？」

「いや、何て言うのかな。女子高の空手部みたいだなあって思ってカッコよくて強い先輩ってモテるんだよねえ。バレンタインデーには靴箱にチョコレートが入ってたりしてさ」

「へえ……」

館長は関東の方の何処かの高校で空手を教えていたという経歴の

持ち主で、いかにも教育者っぽい無駄な爽やかさを漂わせている。悪い人間でないのは知っているが、最初に入った高校の教師を思い出させるのでアタシは距離を置いている。

それはともかく、その手の女子高ノリには心当たりがなくもない。何を隠そう、今年のバレンタインデーにアタシの靴箱で同じことが起こっていたからだ。おまけに鳥肌が立つような手紙までついていた。

栗原玲央さま

あの、すごく迷ったんだけど、手紙を書くことにしました。あなたに首ったけです。転校してきたときから好きでした。

あなたのことを考えると胸が締め付けられます。

でも、女の子にこんなこと言われるの、嫌ですよ。好きになってくれ、なんて言いません。ただ、遠くから見えます。

あなたのファンより

生まれて初めてのことに、アタシは柄にもなく狼狽した。

チヨコレートをあげたことならある。しかし、まさか、自分もらう立場になるうとは。しかも手紙付きで。なんだ、遠くからって。重ねて断言するが、アタシにはそっち系の趣味はない。

けれど、さすがにこれは効いた。心臓がバクバクいって顔は思いっきり赤面。真後ろに誰か立とうものならゴルゴ13並みの勢いでぶん殴っていたに違いない。

正直困った。けれど、誰にも相談のしようがない。

明日香に話そうかと思ったのは寸でのところで思い止まった。自分を徹底的に冷やかすネタを提供するほどアタシは物好きじゃない。

普通の相手ならちょっとばかり不機嫌を装って睨みつけてやれば済むが、困ったことに明日香はアタシのそういう態度をもともしない。

結局、チョコレートは出所を伏せて明日香の胃袋に送り込んだ。アタシは甘いものが苦手でチョコレートはかなりビターじゃないと食べられないのだ。「間違えて買ったけん、やる」というやや不自然な言い訳に明日香は怪訝そうな顔をしたが、彼女はアタシと逆に甘いものが好きなのでそれ以上の追及もなくあっという間に平らげやがった。

懸命に思いの丈を綴った手紙を捨てるのは忍びない気もした。けれど、持っているといつまでも落ち着かないので、我慢して三回読んでから目を伏せてシュレッダーにかけた。ちなみに字がとても綺麗で、おかげでアタシはしばらくの間、誰かの肉筆を見るたびに筆跡を凝視してしまう奇妙な癖に悩まされた。

結局、その後のアプローチがなかったので手紙の主が誰だったのかは分からないままだ。ただ、ひよっとしたら かなりの誤解、または勝手な思い込みであるにしても アタシという人間に好意を抱いてくれる人間がいたのかと思うと、せめて誰だったかくらいは知れたかった。

そう思っても罰は当たらない筈だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5076y/>

碎ける月

2011年11月17日03時12分発行